

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：白石 祥和（しらいし よしかず）
- (2) 年 齢：40 歳
- (3) 参加事業：第 11 回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」
（青少年分野、ドイツ派遣）（2012 年）
- (4) 職 業：特定非営利活動法人 With 優 代表



■ 特定非営利活動法人 With 優を立ち上げるまで

漠然と命にかかわる仕事をしたいと思い、消防士を目指していました。消防士合格を目指しながら、学校関連や民間企業など多くの仕事を経験しました。そうした経験の中で、学校や会社になじめない人たちがいることに気づきました。

同じ頃、私の同級生が行方不明になってしまい、その後自ら命を絶っていたことが分かりました。ご遺族は自分の子供が亡くなったことを誰にも言えず、隣町にひっそりと引っ越されました。お線香を上げに、お宅に伺ってお話を聞いているうちに、「それでいいんだよ」とか、「一緒にがんばろう」と言ってくれる人が一人でもいたら、もっと違った結果になっただろうと思わざるをえませんでした。私も、消防士になるという夢を叶えることができず、人生初の挫折を経験したばかりでしたが、クラスになかなか適応できない子供の支援をしていたことや、同級生が亡くなったことをきっかけとして、学校に行けない子供たちのための学校を作りたいという思いが強くなっていきました。そして、25 歳の春、仕事を辞めて、学校に行けない子供たちの学校を立ち上げることにしました。まずは自分の思いをチラシにして、1 か月半の間、米沢市内を自転車で回って、7000 軒ほど訪問しました。ピンポーンって鳴るので玄関に出てみると、こないかつい若者が立っていて、突然「学校を作りたい」なんて言い出すんですから、あまり受けはよくなかったかもしれません。それでも、7000 軒訪問して、協力したいという人が 11 名現れたんです。協力してくださる方がいるんだからと思って、任意団体として「With 優」を立ち上げました。地域のたくさんの方に支えていただきながら 15 年間運営してきました。

■ 応募のきっかけ

内閣府から若者支援に関するメールが時々来ており、その中にあった募集の案内のメールがきっかけだったと思います。私が応募したのは、団体を立ち上げてから 6 年目の年、学校に行けない子供たちのフリースクールから事業を開始し、子供たちで運営するカフェレストランや若年無業者の就労支援事業を始める等、事業を拡大している時でした。そのような中で、大人になってから働くためのスキルを学べる場の必要性や、地域の方をこれまで以上に巻き込み、若者の支援を行っていく必要性を感じ、自主事業として中間的な就労の場づくりの構想をしていた時でもありました。私たちのような地方都市ではそもそも人口が少ないのはもちろん、受け皿になるような地域資源も少なく、今後事業を発展させていくためには、全国・世界と繋がる必要性があると感じました。そして**何より、自分自身が一度立ち止まる機会**が欲しいと思ったので応募しました。実際のプログラムはもちろん、事前・事後研修も含めて、個人としても法人としても大きな転換点になったのは間違いなく感じています。訪問国であるドイツの事例を、そのまま自国、自分の地域で取り入れる難しさはもちろんあるものの、全国から参加した仲間と日常生活から離れて過ごした時間は、大きな財産でもあり、現在も参加青年の活動からは大きな刺激をもらっています。個人的には、中間的な就労の場をどのように立ち上げるのかのヒントを得ることが大きな目的ではありましたが、その目的が達成されたことはもちろん、その後**つながり続けられる全国の同志**ができたことはとても大きな成果に感じられました。

業務がある中で応募されたわけですが、何かハードルとなるものがありましたか。

当時、組織として、私が学びに行くことができる環境が整いつつあったように思いますが、やはり10日間ほど業務をスタッフに任せてしまうことになり、少し不安に感じた覚えがあります。しかし、いざ研修から帰ってきてみると、自分がいなくても職場は何とか回るのだなと思ったことを覚えています。

事前・事後研修のどんな部分を評価されますか。

これまでディスカッションをする機会があまりなかったので、**熱量のある、非常に優秀な参加者の皆さんと、若者支援やユースワークについて徹底的に議論できたのは貴重な経験**でした。レベルが高くて、ついていくのに必死ではありましたが。

どのプログラムが「自分自身が一度立ち止まる」経験になりましたか。

プログラム中、夜、団員と語り合えたことです。自分がやりたいことなど、同じ年代の人とゆっくり話げできました。普段は仕事をするだけで精一杯であり、夜寝るためだけに家に帰っているような生活でしたから、そのように時間を忘れて話げできることは非日常の世界であり、大切な時間でもありました。

中間的な就労の場を立ち上げるヒントを得るという目的は達成されましたか。

達成しました。就労などがうまくいかない若者は、家庭が居場所ではなくなりつつあったり、友人などの人間関係も希薄であったりすることが多いのはもちろん、働いてからこそ大きな壁にぶつかるので、夜に気軽に相談に来られる場の必要性も感じていました。そこで、会員制の居酒屋を運営し、一般就労を目指す若者の労働の場として、保護者や若者の相談を受けたり、居場所づくりをしたりすることを考えていましたが、ドイツ派遣を通じてどのように若者や地域の方を巻き込むのか、多くのヒントを得ることができました。

■ キャリアパス向上にプラスになった経験

参加した青年の活動のフィールドも多様であり、その参加者と共に個人の目標以外に同じチームとして何を学び、何を持ち帰れるのか語り合えた時間からチーム作りについて学べたことは非常に大きかったと感じています。事業参加当時も法人を運営する上で様々な悩みがありましたが、悩みを解決するというよりは自身の**モチベーションがとて高くなり**、更に地域を変えていきたいという気持ちが強くなりました。「地域づくり」を掲げて事業を展開していましたが、「日本人」としての意識、社会を変えたくても変えることができない環境下にある人の方がずっと多いのだということも実感できました。

モチベーションを上げるどんな体験がありましたか。

私はずっとサッカーをしてきて、サッカーの「日本代表」というのにあこがれていましたが、残念ながらプロのサッカー選手にはなれませんでした。分野は違いますが、内閣府事業で**日本の代表としてドイツに学びに行ける**というのはとてもうれしかったです。ドイツに派遣されるからには**絶対に何か形にして成果を残そう**と思っていました。

■ 特にプラスになったプログラム

訪問先での視察の時間が非常に充実していたことは言うまでもありませんが、事前の研修等でも団としての共通認識や目的も共有でき、派遣の時間は限られている中で参加者との振り返りやディスカッションが非常に有意義でした。訪問国の文化等はもちろん違いますが、アーレンスブルク青少年連合の視察は最も刺激的でした。子どもたちを中心として地域や行政に対して行っている取組、組織としての行政との関わりも含めて、国内では前例がないような取組でした。

具体的にどのような取組が参考になりましたか。

青少年連合の職員は、18歳の青少年で構成される理事会よりも下の立場にあり、最も権限があるのは大人ではなく青少年でした。役員会のほかに運営委員会もあり、**青少年に関連する市政に対しては、青少年が発言力を持っていること等**、当時の日本では聞いたこともないようなモデルで衝撃を受けました。

もっとこんなプログラムがあればよかった等のご意見があればお聞かせください。

非常に充実したプログラムでした。今後も継続していただきたいです。事業に参加した後も IYEO の活動を通じて県内で新たなつながりができるなど、本当にありがたいことだと思っています。

■ 留学とは異なる内閣府の国際交流事業

参加にあたって不安はもちろんありましたが、事前研修含めてそのサポート体制も充実しており、安心して自分をオープンにでき、学ぶことができたと感じています。また、事前・事後研修では、高齢者・障害者分野に携わっているほかの参加青年と関わることもあり、それぞれの分野の専門家が分野を超えた横断的な課題やつながりを持っていることも感じられました。そのつながりをいかして、派遣後に**自分の地域で企画したシンポジウム等の企画**を実施できましたし、山形県青年国際交流機構等でまた別の世代の方（内閣府青年国際交流事業既参加青年）とともにイベントを開催するなど、青年国際交流事業という共通の経験を通じた新たなつながりができることも特徴だと感じています。

私のように地方にいます、「内閣府」の事業に参加するというだけで、「すごい！」と周りから称賛されます。実際、「たいしたもんだ、頑張ってこいよ」と家族が応援してくれましたし、自分でも自信が持てました。

どのようなシンポジウムを開催されたのですか。

2013年7月26日に米沢市で「青少年育成会議 in 米沢—ドイツの先進事例から何を学べるか—」を開催しました。ドイツ派遣でもっとも印象的だったアーレンスブルク市青少年連合からマネージャーのダニエラ・ゴンザー氏をお招きして、子供や若者が地域に誇りを持ち、主体的に活動できるようになるヒントについて話していただきました。



■ 現在のキャリアパスに影響している事業参加経験

参加前に構想を練っていた中間就労の場づくりについては、事業に参加したことをきっかけに、**立ち上げ方等を大きく変えました**。その結果、地域の多くの方の支援を得ることができ、ドキュメンタリー番組として全国でも放送され、県内に関しては毎年放送していただいています。そして事業を現在まで継続することができています。一緒に参加した青年とは現在も交流が続いており、つながり続けることで良い意味で見守ってもらっています。参加青年もライバルとして負けたくない活動を継続しています。

中間就労の場づくりについては立ち上げ方をどのように変えたのですか。

事業参加前には、With 優の職員5名で運営立ち上げの準備をするつもりでしたが、ドイツでの学びを通して、利用者にも企画段階から運営に携わってもらうことにしました。職員3名とニート状態の若者7名で活動を始め、一つのチームとしてどのようなものが地域で必要とされているのかを検討しました。今では、行政サービスではなく、**利用者を巻き込んだ「チーム支援」**が活動の土台となっています。

■ 社会貢献活動

派遣の翌年には訪問先で最も刺激を受けたアーレンスブルク青少年連合のダニエラ氏をお呼びして、広く市民を対象にその事例を紹介したり、日本の教育や青少年活動に関して考えるイベントを開催したりしました。また、介護の仕事についてシンポジウムを開催する際に、同じ年度の派遣事業の高齢者分野で参加した青年の方をお呼びして、広く市民を対象にイベントを開催することもできました。

「チーム支援」というのが参加プログラムのキーワードでもあったように感じています。自分の地域を変えていくのが法人のミッションですが、そのためには、法人の職員はもちろん、地域の多くの方を巻き込む必要性があり、自分がつながりを持ったすてきな活動や人を地域につなげていくことは大切だと感じました。

■ 事業参加時の国際的・地域的な人的交流

事業参加時の青年との人的交流は派遣後も交流会や勉強会という形で継続しています。コロナ禍では直接的な交流は難しいですが、SNS等で近況を確認し合っています。派遣翌年にお呼びしたダニエラ氏も、昨年日本にプライベートで遊びに来る予定でしたが、来ることは叶いませんでした。またお会いしたいです。



2019年、フリースクール卒業式にて

白石祥和氏プロフィール

2007年の立ち上げから現在までの行政や外郭団体との協働実績は約100件以上。2009年、やまがた公益大賞グランプリ受賞。2013年、あしたのまち・くらしづくり活動賞主催者賞受賞。米沢市市民福祉大会社会福祉事業協力者・奉仕者表彰。2015年、社会貢献者表彰受賞。2016年、シチズン・オブ・ザ・イヤー受賞。2017年、米沢有為会教育功労者表彰。山形県精神保健福祉協会会長表彰。2020年、第12回若者力大賞ユースリーダー支援賞（個人部門）受賞。2013年、NNNドキュメント『僕らの居酒屋プロジェクト 孤立する若者を救え』（全国放送）、2017年、NHKドキュメント『地域で拓く子どもの未来～米沢・フリースクールWith優～』、2018年、YTSゴジダス 火曜イチオシ『地域と繋がるカフェ』、2018年、さくらんぼテレビ PRIME ニュース『広場カフェはるにれ』、2020年、NNNドキュメント『失敗してもいいよ ～孤立を救う居酒屋物語～』（全国放送）他、日本経済新聞（全国版）、読売新聞（全国版）、その他、新聞掲載は180回ほど。2018年から山形大学地域教育文化学部 非常勤講師